

林^{あつ}叔子先生をお訪ねして



赤 間 峰 子

つゆの晴れ間の一日、私は生まれて初めて、静岡の駅で新幹線をおりました。幼児教育ひと筋に生きてこられ、八十四歳を迎えられたばかりの林^{あつ}叔子先生をお訪ねするため……。現在ではよき後継者を得られて園長という職は退かれましたが、幼稚園と隣り合わせのお宅で毎日子どもたちの顔をこらんになり、声を聞きながらすごしておられる、とあらかじめうかががっておりました。私の方の予定では桜花幼稚園の名前にちなんだわけでもありませんが、当初は四月ごろにおうかがいしたいと思っておりました。ところがあいにく悪いかぜがはやって、先生もおやすみになっておられるとのこと、もう少し暖かになれば……とその日を楽しみに待っておりました。

「今度はだめかもしれんと思ったのに、あんたは不思議な人だ」とお医者さまにもいわれましたが、こんなして起きておられるのはほんのここ十日ぐらいですよ」とおっしゃる先生は、本当にお顔の色もよく、現代的なタイカラーのワンピースを召して、チョココンと机の前におすわりになって私を待っていて下さいました。あとでいろいろとお話しいただいたお言葉の中に、何よりも幼稚園のこと、子どもたちのことをいつも思っいらっしゃることがしのばれ、それこそが先生のご長寿のもとなのだとしみじみ思いました。何しろお小さい時は、「この子は十歳までしか生きられないだろう」とおっしゃられたほど病弱でいらしたのでさうです。私は相変わらずの不勉強で、林先生のお口からうかがうまで、先生が私



と同じ女高師保育実習科ご出身の大先輩でいらっしやることを存じませんでした。師範ご出身でありながら、倉橋惣三先生がたまたま同郷でいらっしやるということもあり、倉橋先生に傾倒されて、お母さまが園長でいらした現在の桜花幼稚園をおつきになったのだろう、ぐらいに考えておりました。このことをうかがって私は、この大先輩との大変なへだたりなどということはそっちのけで、「私の知らないお若かったころの倉橋先生のお話を」などと、とたんに図々しくなっていました。先生も「幼稚園や私の考えなんかはこれを見ていただければおわかりになると思いますよ。今日は気楽にお話

をいたしましょう」とおっしゃって幼稚園の創立五十年（昭和三十五年）、五十五年の折の記念の印刷物、先生が若い先生方に倉橋先生の保育のころを理解していただくために書かれた小冊子など、私に下さいました。そして私もお言葉に甘えて、それらは帰りの新幹線の中でゆっくり読ませていただくことにして、思いつくままに楽しいお話をきかせていただきました。

先生が保育科にいらした当時の主事は安井哲子先生で、非常に厳格な方だったとか。そしてデュイのことを深く研究していらしたせいで、黒板いっぱい横文字でデュイについてお書きになって、それは学生の方から英語はわからないからとやめていただいたということなど、昔の教育者の一つの型を見るように、興味深くうかがいました。お掃除などもガラス戸のさんなどを布を持って安井先生があとで調べになったとか、私たちの学生時代ああの幼稚園の廊下を手で一生懸命力を入れて雑きんがけをしたことなど、なつかしく思い出しました。もちろん冬でもお湯などは使いませんでした。そして先生のおっしゃるには、動物園とか、植物園へ行っても必ず帰ってから子どもが興味を持ちそうな動物の画を

かくなど、すべてが勉強につながっていて、それこそ勉強々々で、先生をはじめ体をこわされた方がずいぶんあったとのことです。教科書は一つもなく必死でノートをとって、寮に帰ってからお互いにノートを交換して足りないところを補ったことなど、楽しい思い出と話されました。

その中でもやはり倉橋先生のお講義は生涯忘れられないものがいっぱいあった、と同じ倉橋先生に直接教えをうけた私は少々はずかしくなるように、自信をもって生き生きと話して下さいました。

「心理学も、児童心理でなく、もう一つさげて幼児心理を学ばなければいけない」といつも先生はおっしゃってました。ともすれば現実的なことばかり考えがちな大人のこころを離れて「非現実的な幼児の心理を考えなさい」と。「みなさんは児童宗でなく幼児宗の信者にならないければいけませんよ」といつもいわれました。ですから、子どもたちが馬にのったり、その馬に乗る人になったりして遊んでいますね。すると子どもは本当に楽しそうに馬になりきっているのです。それを「馬にばっかりなっていてかわいそう」こういうことをいうのは幼児の心理がわかっていない大人です。お母さん

が買って下さったばかりの靴、それを歩いて水の中をザバザバと歩く。子どもは靴の中に水が入る、その感触を楽しんでいるのです。「あらあら、せつかくの新しい靴なのに」と叱るお母さんや先生、これも同じことですね」

私は倉橋惣三選集の一節を読むような気分で、この林先生のお話をきいていました。先生は及川先生のこととてもなつかしそうにいろいろと話されました。

「私は日本画が好きで、荒木十畝先生にもついていましたし、よく黒板に画をかかせていただきました。それを及川先生はとても喜んで下さいましたし、及川先生もよくお上手に画をかいていらっしやいました。先生もご主人さまも日本画をかいていらっしやいましたからね。それと及川先生で思い出すのは、はさみのことです。ある時子どもがお友だちのはさみをエプロンのポケットに入れていたのです。それを見たお母さんが「だめですよ、お友だちのはさみなんかをとっちゃ。そんなことは泥棒の始まりですよ」といったのです。その時先生は「その子はきつと何かを一生懸命にしている、急にはさみがあることになって、ちやうどそばにいたお友だちに『はさみ貸してね』といったのでしよう。そしてそのまま

それをポケットに入れてまた一生懸命仕事をつづけたのでしよう。泥棒なんていう言葉を使ってはいけません”とおっしゃったのです。いわなくてもいいことをいったということですね。

よく私の園でも子どもが家の庭に咲いた花などを幼稚園に持って来ます。“先生、お花”と渡されたら私は、すぐに水にさします。でも先生の中には“ありがとう、今忙しいからあとでね”という方があります。すると子どもはもう次からその先生のところへは持って来ません。子どもの子どもらしさをわかってやるということが子どもを理解することにつながるのですね。

それから、ある時子どもがドアの所で遊んでいて、かぎの穴に指が入って抜けなくなりましたのです。その時私たちはただ驚いてどうしていいかわかりませんでした。でも及川先生は“動かさしないで、動かさしないで”とおっしゃりながらとんでいらっしやいました。そして落ちついてその穴に石けん水をお入れになり、子どもの指はスツと抜けました。そこでご処置もさることながら、私は“動かさしないで待つ”ということ、そうすれば子どもの方から教えてくれる、子どもに教えられるということが幼児教育の世界ではいっぱいあると

いうことをしみじみ思うのです。」

私も学生時代及川ふみ先生の組で実習をさせていたのだて、まるで園児と一緒にたってお世話をかけていたことなど、なつかしく思い出しながらお話をしますと、林先生もどんな者がおうかがいするかと案じていらっしやったのでしよう。「本当にお話が通じてうれしい」とおっしゃって下さいました。このほか私の心に残っていることはたくさんありますが、先生がご家族のことをとてもうれしそうにお話しながら、先生がご苦勞を共にしていらした方、そしてそのご主人さまは幼稚園の事務、經理一切を、先生がお頼みになったわけではないのにとりしきられ、今では林先生は何もおわかりにならないのだと笑っていらっしやいました。お孫さま方も幼稚園教諭の免状をおとりになっていらっしやるとか、「私はとても幸せです」と心からおっしゃいました。

それから幼稚園の経営についても、すべてを「子どものため」と思っただけの先生の精神が長年の間に父兄の方にもしみこんでいったのでしよう。新しく何かを揃えたいと

か、園舎を広げたいとかという時にも決して無理はなさらなかったのに、いつの間にか父兄の方が協力して下さったという事です。保護者会という名称も、もっと広い意味で、という事で後援会に、母の会も母姉会に、となかなかのアイデアマン（ウーマン）でいらっしやるように思いました。そしてもう一つおもしろいことをおっしゃいました。

「あなたは男女同権ということをどうお考えですか？ 私には形だけ同じことをするのが本当の男女同権だとは思いません。男に向いた仕事、女に向いた仕事をそれぞれに同じ程度にすることだと思えます。ですから母姉会などでお母さん方が活躍なされば、お父さん方も、なるほど女でもこんな立派なことができるのか、と女を見直して下さる。それが本当の男女同権につながると思っておりますよ」

「もうひとつ、うちのせがれなんか、何かというと、今は時代が違いますよ。現代人は……」ということを申します。私はこれがどうもふにおちません。いくら時代が変わっても変わらないものというものはちゃんとあるはずですよ」

私も、理屈ではわかかっていても、娘たちのしつけなどで主人といい合いなどをした時、最後の逃げ口上のように「だって今は時代が違いますよ」といってしまいます。今さらの

ようにそれらのことを反省したり、男女同権のお話など、全くそうだとすっかりうれしくなったり、時間のたつのも忘れてお話をしてしまいました。冬にひかれたかぜがやっとおなおりになってまだ十日ぐらいとおっしゃったのに、ついついお元氣な先生のお姿やお話に私もうっかりしてしまいました。昭和五十五年には幼稚園の創立七十周年と先生の八十八歳、米寿のお祝いが重なるというおめでたいお話に、ぜひお元氣で米寿、卒寿、白寿とお祝いがおできになるようにと心からお祈りして失礼いたしました。靴をはいて見上げますと見事な桜の木が枝を広げていて、春はさぞやとしのばれました。

帰りの車中で読ませていただいたものの中で、ことに林先生のお母さま、宇式かん先生のご生涯は、文久元年江戸にお生まれになったということからして、私から見れば夢のような数々を、興味深く読ませていただきました。

最後に先生のご心境をよまれた和歌を一首ご披露いたします。

何ごとも子らにささげてくらす今日

明日もしあわせいつもしあわせ

(一九七六・六・二二)